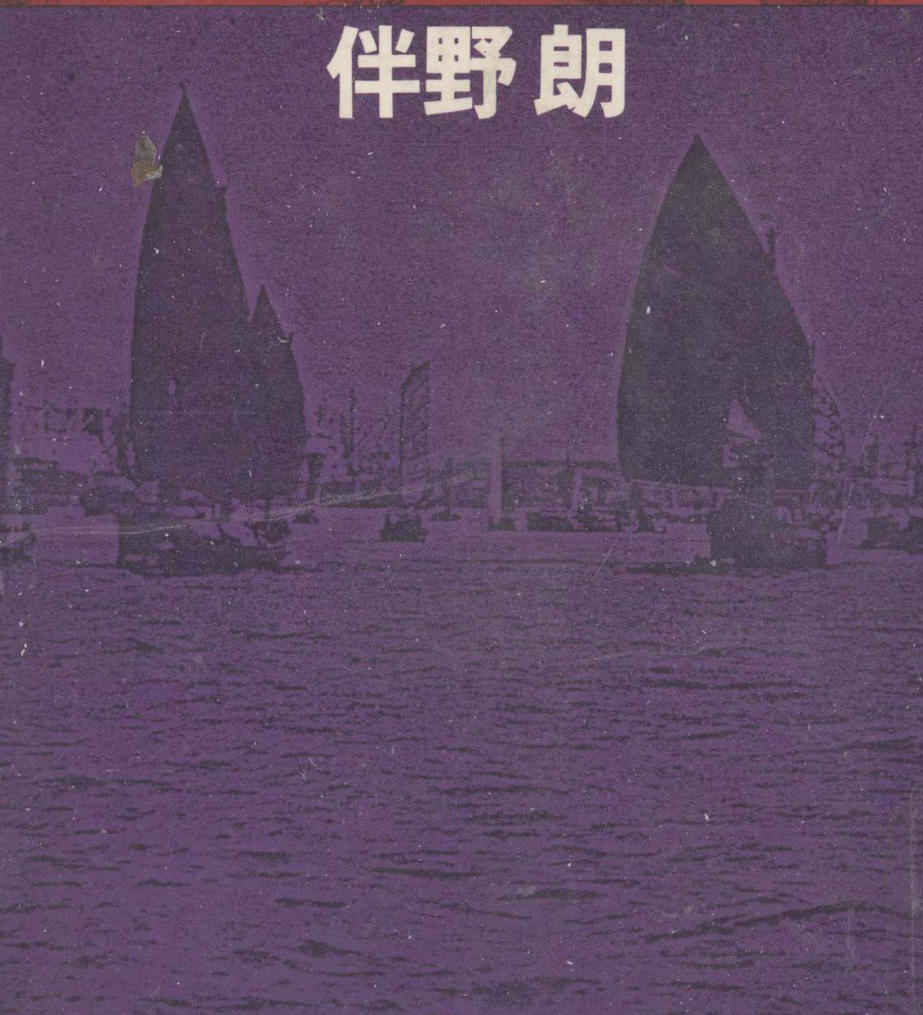


33時間

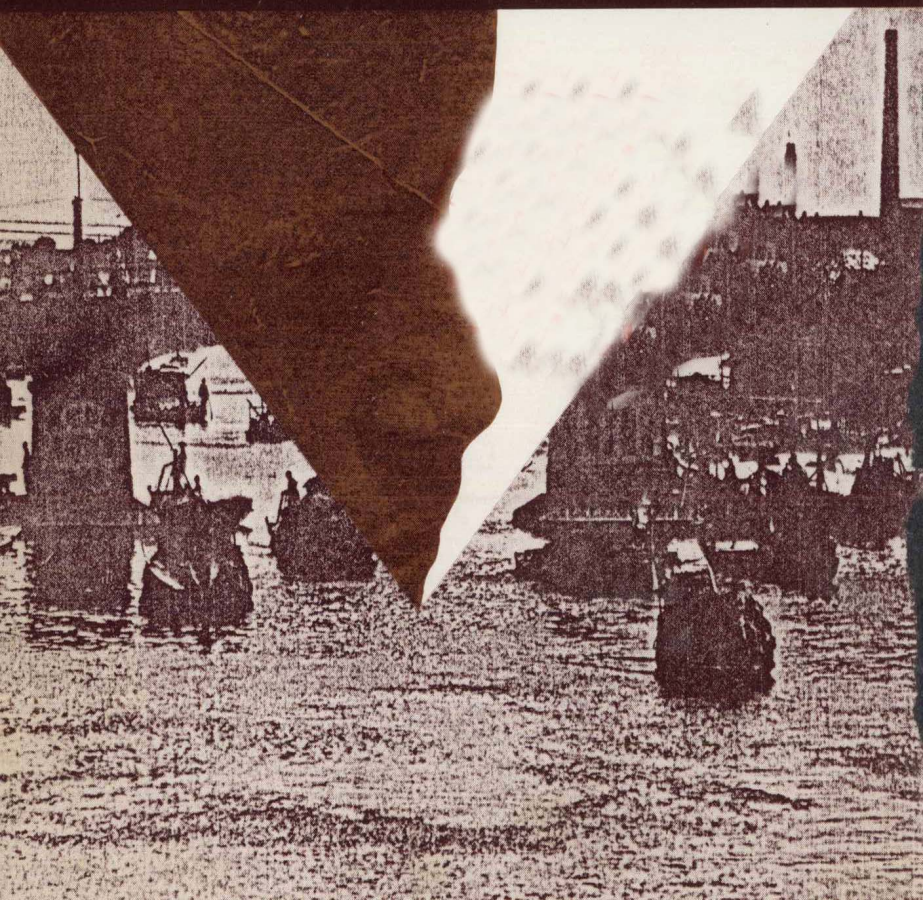
伴野 朗



33時間

伴野 朗

朝日新聞社



33 時間

第一刷発行／昭和五十三年四月三十日

第二刷発行／昭和五十三年六月十五日

定価／八八〇円

著者／伴野朗

装幀／辰巳四郎

発行者／角田秀雄

印刷所／共同印刷株式会社

発行所／朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州

©Ro Tomono 1978 0093-234570-0042

目次

プロローグ

7

第一部

23

八月八日夜 25

八月九日 55

八月十二日 73

八月十五日——十六日未明 100

第二部

129

八月十六日朝 131

八月十六日午前十一時 151

八月十六日午後一時三十分——三時 164

第三部

八月十六日夜 179

八月十七日朝 195

八月十七日午後 217

八月十七日午後七時——九時 241

八月十七日午後十一時——八月十八日午前零時 258

エピソード

283

あとがき 289

177

33 時間

プロローグ

夕靄が、いつの間にか乳白色の、密度の濃い、深い霧に変わっていた。

陽はすでに、西の彼方に没している。だが、薄暮の、けだるいような明るさは、まだ残っていた。べつとりと貼りついた、粘っこい暑さは、昼間のままであった。

静寂が、あたりを支配していた。じつとりとした、重い霧が、ゆっくりと夏草を自分の領域に引き入れていく。

飛行場とは名ばかりの、荒れ果てた原野であった。南の隅に、焼け落ちた建物の跡が残っていた。その傍に立っている、一本の吹き流しと、あちこちに散らばっている戦闘機の残骸が、辛うじてここが飛行場であることを思い出させてくれた。

霧のなかに、二人の男が立っていた。

一人は長身であった。三十歳を少し出ているように見えた。陽に焼けた精悍な風貌であった。太い眉、肉の薄い高く尖った鼻梁、がっしりとした顎。そのすべてが、この男の意志の強さを物語っていた。

なによりも、鋭い眼光をしていた。切れ長の双眸が発する輝きのなかには、なにか妖しい煌めきがあ

った。そして、その底には、非情なまでに研ぎすまされた冷徹さが秘められていた。

固く結んだ唇の色が、はっとするほど赤かった。全体の印象と、ちぐはぐな赤さでさえあったが、強烈な個性を打ち消すほどの存在ではなかった。

軍服の胸には、白い参謀モールが吊られていた。男はゆつくりと、腕時計に眼を走らせた。

「遅い。遅いな。川本少佐」

二歩ほど離れて後ろに立っていた小柄な男が、ピクツと軀を強^{こわ}ばらせた。

「そのようですな。中佐殿」

川本少佐の胸にも、参謀モールがあった。烏天狗を連想させる男であった。色が黒い。頬が削げ、唇がとんがっている。口を開く前に、唇の周囲の肉をヒクヒクと痙攣^{けいれん}させる癖があった。

中佐と呼ばれた男は、前方に広がる原野を見詰めたまま言った。

「定刻をもう二十分も過ぎている。それにこの霧だ。——ここまで辿り着いても、無事に着陸出来るかどうか……」

最後の言葉は、独白のようであった。

「定刻に南京を出発したという連絡が入っています」

川本少佐が、遅刻の原因は自分の方にはないことを宣言するかのように言った。

「そんなことはわかってる。要はなぜ遅れているかだ」

中佐は、再び腕時計に眼を落した。

「山並大佐は、時間にはひととき厳格な方だ。途中でなにかが起こったのかも知れない、と言っているのだ。制空権をわが軍が失ってからすでに久しい。上空にはグラマンやロッキードがうようよしている。そのなかを飛行すること自体無理だったのだ。派遣軍総司令部の考えていることは、われわれヒラ参謀

にはよくわからんよ」

「お言葉ですが、中佐殿、われわれ総司令部としては万全の措置をとったつもりであります。一昨日の六日には、広島にアメリカ軍の特殊爆弾が投下され、全市が一瞬のうちに崩滅したというではありませんか。だからこそ、いまの時期を失しては——」

少佐の言葉を断つように、後方から叫び声があがり、一人の男が転げるように駆けて来るのが見えた。「中佐殿、爆音です。爆音が聞えます」

「なにっ！」

二人は、耳を凝した。

——最初は、昆虫の羽音のようであつた。だが、それは次第に待ちに待っていた響きに変つていった。確かに、飛行機のエンジンの音であつた。

「来た。あれだ、間違いない。津山一等兵、発火装置に点火しろ。急げ！」

全力疾走によって息をきらせていた津山一等兵は、この命令に応えて、まるで別の人間のように間髪をおかず行動に移った。

飛行場の中心部を知らせるために、十個のドラム罐が用意されていた。なかには、たつぷりとガソリンを吸った綿布が入っていた。津山一等兵は、次々に十個のドラム罐にマッチを投げ入れた。

どっと、黒煙と炎が中天にまで昇った。

だが、薄暮は次第に、闇に支配権を譲り渡そうとしていた。霧もさらに濃度を増しつつあつた。

「上空から、この火が見えるでしょうか？」

川本少佐が、絶望的な声をあげた。津山一等兵は、流れ落ちる汗を拭おうともせず、彫像のように空を見上げていた。

「神仏のご加護を祈るよりほかはない」

中佐は、天を仰いだま言った。

胸の締めつけられるような一秒、また一秒が過ぎていった。
霧を突いて、爆音が近づいた。

一機ではない。少なくとも、それは数機が存在を示していた。

「来たぞ！」

川本少佐の口から、期待感が言葉となった。

だが、その願いは虚しくはずれた。

爆音は、彼らの頭上を通り過ぎて彼方に消えて行った。

「」

誰ともなく、深い溜息が洩れた。

「信号の火が見えなかったのでしょうか？」

責任感で思いつめた表情の津山一等兵が、心配げに訊いた。

「わからん。もつとガソリンをかけてみる。火を消すなよ」

中佐は、双眼鏡で霧のなかを追いながら言った。

津山一等兵が再び、ぱつと駆け出した。

五分後、また爆音が近づいて来た。

「それ、ここだ。しっかり見つけてくれよ」

津山一等兵が、祈るように呟いた。

今度の爆音は逃げなかった。次第に高度を下げていくのがわかった。

それにしても、よほど豪胆な操縦士に違いない。腕に自信があるうえに、自分には強運がつきまといていると自己暗示をかけている男にしか出来ない放れ業だった。

深い霧、暮れかかっている闇。十カ所で燃やしている火が見えていたにしても、それは決死的着陸に違いなかった。

——肉眼で見えていたら、俺は思わず眼を閉じているに違いない。

津山一等兵は、そう思った。

ゴーという響きとともに、ザザツとささくれだった音がした。

車輪のタイヤが、大地を掴む音であつた。だが、車輪は、地を噛まずに、また浮きあがつたようであつた。

一瞬、津山一等兵が身を強ばらせた。冷たいものが背筋を走つたのだ。

再び、ザザツという音。

今度は、確実にタイヤが大地を掴んだようであつた。

着陸は一瞬のうちに終つた。

「――」

三人の間に、安堵の溜息が洩れた。

霧のなかで、なにかが光つた。タイヤの摩擦が発する火花であつた。

怪鳥のような、灰色の巨大な物体が、霧の向うにかすかな輪郭を見せ始めた。ゆっくり、ゆっくりと、その物体は、白い闇のなかから姿を現わした。

津山一等兵にも見覚えのある機種であつた。

三菱四式重爆撃機であった。「飛竜」の名で知られていた。

同じ三菱で生まれた海軍の一式陸攻によく似ていた。引締ったスマートな外形は、この時期の最新鋭機で、陸軍の虎の子的存在であった。

「重爆が、重爆が、この大場鎮飛行場に着陸した——」

津山一等兵は、信じられない物を見てしまっていた。

「飛竜」が、大場鎮飛行場に降りる——そのこと自体が、いまこの眼で見えても、どうしても信じられなかった。

上海北郊にある、この大場鎮飛行場は、軽飛行機専用の飛行場であった。重爆が着陸する必要があるのなら、東十数キロに上海飛行場がある筈であった。

——なにか、特別の隠密行動なのだ。それも、とてつもなく大きな……。」

津山一等兵は、直感した。

そうでなくては、わからない点ばかりであった。

軽飛行場に重爆が、悪条件の夕霧をついて着陸した事実を、事実として頭のなかに叩き込もうと、津山一等兵は懸命であった。

それにしても、神技に近い着陸術だと言わねばならなかった。上空から霧を通して見える火は、螢の瞬きほどもなかったに違いはない。

「飛竜」は、二つのエンジンを軽くふかし、機体をゆっくりと終着点に近づけながら、その全容を、三人の前に晒した。

上空には、まだ爆音が残っていた。護衛の戦闘機であった。一機、また一機と低空で、頭上を飛び去った。「飛竜」の着陸を確認しているように見えた。

これも新鋭の「疾風」であつた。

「疾風」——中島四式戦闘機は、戦争後半に登場した連合軍の新式戦闘機群の圧倒的強さに対抗するために生まれた。速度は、日本戦闘機中最も速く、航続距離も一六〇〇キロと足が長かった。二〇ミリ機関砲二門、一二・七ミリ機銃二挺を備えた火力は、アメリカのP 51やP 47と十分に渡り合えるだけの実力を持っていた。

いわば、海軍の「紫電改」とともに、日本最後の実力派の戦闘機であつた。

——大陸にも、まだ「飛竜」や「疾風」が残っていたんだなあ……。

津山一等兵は、素直にそう思った。

そういえば、久しく日本の飛行機が空を飛ぶのを見たことがなかった。

昭和二十年を迎えて、大陸の戦局は、好転を望めぬ絶望的な空気に覆われていた。といつても、決定的な敗北を喫したわけではなかった。百万の大軍は、健在であつた。その意味では、玉砕相次ぐ南方戦線や後退を余儀なくされたビルマ戦線とは違つていた。

だが、「負けてはいない」と思つてゐるうちに、とても勝戦は望めない泥沼のなかに、どっぷりとつかつていた。特に航空機の払底は、誰の眼にも明らかであつた。大陸の天空を自由に飛び回つてゐるのは、アメリカの新鋭戦闘機であつた。

定期便と化した敵機の空襲の度に、数少ない日本軍の飛行機は、待避壕に逃げ込むばかりであつた。

——この時期に、「飛竜」を飛ばし、それに「疾風」を直衛の戦闘機につけるなんて、まさに異例のことだ。よほど重要な人物が乗つてゐるに違ひない。

津山一等兵は、眼の前に近づいて来た「飛竜」をまじまじと眺めた。

その直感は正しかった。

大陸での最後の航空兵力を注ぎ込んでの、この飛行便の重要さは、上海駐留第一三軍司令部の情報主任参謀・九鬼隼人中佐と、支那派遣軍総司令部上海連絡部付参謀・川本忠広少佐が、極秘裏に出迎えに来たことでも裏付けられた。

闇が近づいていた。

「飛竜」の右のプロペラが回転数を落とし、続いて左のエンジンも咳き込むような音とともにスロットルが絞られた。四枚のプロペラが肉眼でも見とどけられるほどになり、間もなく停止した。

「車を！」

九鬼中佐の声に、津山一等兵が弾かれたように駆け出し、飛行場の脇に停めてあった二台の黒塗りの乗用車のうち手前の車の運転席に転がり込んだ。焦っているためか、エンジンは一回ではかからなかった。三回目にイグニッション・キーを回したとき、やっとエンジンが始動した。

津山一等兵は、中佐の命令を思い出し、ライトを消したままで、車をスタートさせた。

——日本は、本当に敗けるのだろうか。

突然、なんの脈絡もなくそのことが頭に浮かんだ。

——司令部のお偉いさんたちの、内地への逃亡用の飛行機ではないだろうか？

九鬼中佐は、「飛竜」の底部のハッチに当るように、自動車のライトをつけさせた。

二条の光のなかに、「飛竜」が浮かびあがって見えた。右翼に数発の弾痕があるのを、九鬼中佐の鋭い眼は見とっていた。

やがて、「飛竜」のハッチが開いた。最初に姿をみせたのは、飛行服の航空兵であった。彼は、手に持っていた踏台をハッチの下に置いた。それから三十秒経った。不意に、よく磨き込んだ黒皮の長靴が